

---

# 旅立ち待合室

蒼空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旅立ち待合室

### 【Nコード】

N9922M

### 【作者名】

蒼空

### 【あらすじ】

それは人生に幕を下ろし、肉体を離れ飛び立つところから始まる。  
ふと気付くと私は廊下に立っていた。そしてその先には不思議な部屋が。【旅立ちの部屋】そう記されてあるプレートがかかっている。主人公の‘私’がそこで見たものは。……甦る記憶！遠い昔の仲間！熱き友情の物語り。

山際に桜の花が色挿す頃。花曇りの灰色の空に、私は頭から吸い上げられていく。静かに、風だけを感じる。足元には住みなれた町と見慣れた風景がぐんぐんと広がり、少しの懐かしさを残し、儚く遠ざかる。

別れの時だ。

今日、私の「命」は終わりを遂げた。俗に言う「人生」という一節に終焉を迎え、飛び立ったのだ。

共に暮らした家族に看取られ、地を離れ、静かにこの時を迎え、上へと向かう

両腕を広げ、掌で空を受け入れた。私は今までこの掌で、色々なものに触れ、感じ、生きてきた。然したる山谷もなく肅々と齢を重ね、多くの人の人生とその最後をもたくさん見てきた。そして今日、私の番がやってきた。

死ぬ間際には、過ごした日々が走馬灯のように現れるというが、実際はそうではなかった。徐々に、ゆつくりと、生きた記憶が薄れる。私の場合はそうだった。

上がっていく感覚をおぼろげに捉えながら、ふと広げていた掌を見た。あれ……やけに皮膚が若い。左手を裏返して甲の方を見てみると、シワがない。身体を抜け出した幽体が、年月を重ね移ろったはずの肉体の記憶が、時を遡っているのか？今の私に姿があるとすれば、二十代くらいの頃のものだろうか。しかし、それ以上深くは考えなかった。

もうあまり、考えることに意味はない。

上がるスピードが増して行く。

速度が上がれば上がるほど、感じる摩擦は消えてゆく

しばらくすると私は、いつのまにか廊下に立っていた。明かりはない。しかし辺りは蒼く、仄暗く光っている。

なんとも不思議な場所だ。寒くも暑くもなく、ただ寂寞としている。しかし、不気味だとは思わなかった。これが、あの世の住人の仲間入りをした、ということなのかもしれない。

後ろを振り返ってみる。すると背後には何も無い。引き返す道なども見当たらない。しかしそれで構わなかった。八十をとおに過ぎ、この期に及び現世に戻りたいなどとは思わない。私は廊下が伸びているだけの前面に目をやった。そして自分が歩むべき方向を見た。しかし、神聖な心もちで前方に向かったものの、意外なことに気付く。廊下は先の、数十メートル進んだ辺りでぶつりと途絶え、行き止まりになっているのだ。はて、これはどういうことだろう？

しばらくぼうつと見ていると、そのすぐ右手から明りが射し、廊下の一画を照らし始めた。そして反対側の壁に目をやると、先ほどまでは気付かなかったのだが、白い布を纏った大柄で長髪の老婆？いや男性だろうか……人が立っている。長髪の髪は金色だ。そして、じつとこちらを見ている。

最初はどきりとして警戒したが、何故だか私は、段々とおかしな気分になった。持ち上がる感情と共に、透明に近くなっていた私の体に少し色が戻る。その後は、半ば吸い寄せられるようにして、廊下の奥へと歩を進めた。

真っ直ぐにその人物の方へと歩いた。近づくにつれて輪郭を持ち始めた布の下は、老婆でも男性でもなく、また女性でもなかった。性別や年齢などといったくくりはないらしい。ただはつきりと分かるのは、聖母のようなオーラを纏い、その奥に絶大な光を宿しているということだ。表情に変化はないけれども、私に向かって微笑んでいるのも確かに感じ取れる。

（この人は……）

ああ、なんだ。良く、知っているじゃないか。

足早になって目前まで行き足を止めると、私は何度も何度も深く

頭を下げた。そしてひたすらに「ありがとう」の言葉を繰り返した。金色の髪の人私の手を取り、依然微笑んでいる。

それにしても……さっきから私は何をそんなに有難がり、執拗なまでに礼を述べているのだろうか。実のところ良く分からない。でも私はしばらくそれを続けていた。そして、そうしなければいけない理由があるらしいことは、込み上げてくる情念のようなものから察した。

静かに私を受け入れる……金色の……髪の……意識が遠のく。気持ち浄化？されてゆく。私は立つたまま、眠ったような感覚に陥った。

まもなくして気を取り戻すと、それを待っていたかのように金色の髪の方はゆっくりと手を挙げ、無言である方向を指差した。

（さあ、行きなさい）

そう言われた気がした。

「はい……では、行きます」

無意識のうちに、私は答えていた。きっと私の何かに「けり」が付いたのだろう。漠然とだがそう思った。

私は最後に深く一礼すると、佇む金色の髪の人にそつと背を向け、示された方へと歩み出た。

どこかへの入り口に行き当たった。そこには気体状の靄もやのようなものが膜を貼っており、中との隔たりを曖昧に示していた。先ほど廊下を照らした光の正体は、ここからしみ出したものだった。

部屋だ。この先に部屋がある。そして中に入ればきっと、数十年の年月に対しての、何かしらの区切りが待っている。何故だかそう思った。無意識のうちに意識する……魂になってからの私はずっとそれを繰り返している。死後の思考の法則というべきか、それとも昇天への導きというものが。心地よくもあるが、なんとも虚ろな感覚である。

私は膜に触れてみた。そして内側に向かい、真っ直ぐに腕を伸ばした。すると、あっと思った瞬間にはそこをすり抜け、吸い込まれ

るようにして内部に浸入していた。

視界は白い光で満ちた。幻想的で柔らかい、和みの光だ。心やすまる白い空間……まるで部屋自体が発光体であるかのよう、ほんのりと温かい。

私はうつとりと光に包まれた。慣れてきた目に映り込んでくるものは、ひよっとすると広大な極楽浄土なのではないかと期待しながら。

目が慣れてくると、次第に部屋の内部が浮き上がってきた。私はその様子に拍子抜けをした。そこには極楽浄土や、「果てがない」などという異世界を演出するような様相はなく、壁があり、家具があり、アルバムのような書物の入った小さな本棚があった。間の広さは人家でいう、リビング程の大きさだ。

部屋を見渡すと、一對のソファとテーブルがあった。天に召される過程で応接セットにお目にかかるとは思わなかったが、それよりももっと奇妙なのは、そこにいる者たちだった。然して広くもないこの場所のあちこちに、どういうわけか、四、五歳くらいの小さな子供達が四方に散らばって遊んでいる。とってつけたような光景だ。

私は訝しげに子供たちを見回しながらも、さらに部屋の奥に目をやった。奥の壁の右手には、ドアのない、出口らしきものがあった。そこに進むべきかどうか迷っていると、侵入してきた場所のすぐ脇に、白銀のプレートがかかっていることに気付いた。白く発光する壁に同調して目立たなかったせいで見落としていたが、気付いた後にはその存在は、異質なまでに私の中に映り込んだ。

「旅立ちの部屋」 私はそのプレートに刻印された文字を読んだ。

書体は文字であるのか絵であるのか、見たこともない不可思議な形状をしている。しかし、確かにそう記されている。

間もなくして私は、急につんのめったようになった。「ん……？」

おかしい。ここまでは自然の流れに沿うようにして順当にやって来たが、今になって、この後に何をすればいいのか、そのすべも方法もちつとも浮かんでこないのだ。気味が悪いほどスムーズに来ただけに、ここにきて一気に見えない壁に阻まれたようだった。さつきからずっとプレートの文字を繰り返し読んでいただけで、この先のことがさっぱり分らない。順序や手順も思い浮かばない。便利だった死後の思考の法則や導きのような感覚は消え、今や全てがベールの中だった。

私は生きていた時の様に、必死に「思考」を凝らしてみた。『考える』という意識動作がどれくらい残っているかわからないが、私は考察した。はて、これからどうしたものか。

もう一度、白銀のプレートを見た。変わらず、「旅立ちの部屋」と記されてある。ここがどこかに旅立つための部屋だとすれば、今が「最果て」ではないはずだ。だとすれば、私の魂の到達点はどこか別のところにあるはずだ。ならばこれからどのようなにして、そこに向かえばいいのだろうか。あの出口のようなところをくぐり抜け、さつさと別の場所を求めて移動すればよいのだろうか。

私は思案に暮れた。もしも案内人、番人、この世界にそのような立場の者がいるとすれば、その者に会い、手順を問いたいものだ。

#### その時

背後から突然現れた眩しい光の塊りが、私の体をすり抜けていった。あ……と思い目で追いかけた次の瞬間、それは女性の姿に形を変えた。三十から四十代くらいの、見た目には普通の人間だ。黒髪を結わえた彼女は子供達の遊ぶ方へ歩み寄ると、その中の一人を抱き上げ、ソファアに座った。

こちらの様子を気にするでもなく彼女は、子供の相手を始めた。いつもそうしているのだろう、ごく自然な立ち振る舞いだ。

私はすぐさま、彼女に声をかけようと思った。問える相手がいるとすれば、彼女の他にいないからだ。慌ててソファに歩み寄ると私は意を決し、子供をあやしている女性に向かい話しかけてみた。

「あのう……」

彼女は、恐る恐る声をかけた私を受けとめるように、ゆつくりと答えた。

「ようこそ」

ようこそ、という受け答えに違和感を感じつつも、会話ができることに上気した私は、身を乗り出して彼女に問うた。

「あの……私は、いえ……ここは、……一体どういう場所なのでしょう？」

彼女は膝から子供を下ろすと、みんなと遊んでおいで、とフロアへ促した。

そして私を見ると、またゆつくりと口を開いた。

「ここは、‘旅立ち待合室’です」

「ええ……はい、そのようですが……」

私は分からないことだらけで、問いたいことの順番が定まらなかったが、まずは目にとまったことから尋ねてみる事にした。

「ここにいるのは子供ばかりですが、何故です？」

彼女は微笑むと、音もなくふわりとソファから立ち上がった。

「みんな自分の刻んだ時を削りながら、ずっと待っているのですよ」  
「はあ」

「彼らの場合、長く待ちすぎて少し小さくなりすぎてしまいました  
が、でも大丈夫」

良く理解のできないまま黙っていると、彼女が私に問いかけてきた。

「そして……あなたの待っているものは？」

「え？ 私の待っているもの、ですか？」

「はい。あなたは旅立つのに、何を待っておられますか？」

「待っている？ 私が？」

「ええ。そうです」

「待つって、何をです？」

一体何の話だろうかときょとんとしていた時、突然私の胸を、



「ドン」という衝撃が走り抜けた。

「うつ、……ゲホッ！」

思わずむせ返った。そして胸元を押さえよめく。

「分かりませんか？ あなたご自身が、待っていらっしやるものです」

私自身が、待っているもの？

そう言われてみれば、確かに、何かを待っているような……何か、大切なものを待っているような……

いや違う。何かを忘れている？そして、それを思い出す事を……

ドン！

「うつ、ゴホッ！ ガハ……」

また来た……！ 今度はすごい衝撃だ。続いて何か喉の奥から突き上げてくるのを感じた。

「私に、尋ねたいことが、おありでしょう？」

みぞおちから這い上がってくるものの感覚に耐えながら、その後ろから何らかの記憶が甦る……

薄れたはずの記憶…… 途切れたはずの記憶……

遠い夏。

爆風で緑樹がうごめいて揺れる

そうだ……！

「ト、トオルと……サトシは……ここに来ましたか！？」

「ええ。来られましたよ」

涙が零れた。

「どちらも、ですか？」

「ええ。トオルさんが先に、そしてサトシさんもじきに」  
「そうか、そうか……」

遠い遠い昔。私には、『大切な仲間』がいた。

今日も暑い。いや、熱い。

この島に来て、もうどれくらいが経ったのだろう。今、空にまた一機、敵の戦闘機が旋回していった。

「おい、水が出た！ 正真正銘の真水！ 早くこいよー！」  
サトシが呼んでいる。

一週間前の夜。自軍キャンプが襲撃された。一番端の小屋で休んでいた私たち小部隊の七人は、雪崩れ込んでくる敵軍兵から逃れるため森に飛び込み、山を抜けた。そして道に迷い、負傷者を抱えたまま彷徨った。今日でもう、六日が過ぎようとしている。

「おい、大丈夫か？ 歩けるか？」

「ああ、平気だ。ちよつと肩を貸してくれ」

足に酷い火傷を負ったトオルの脇に入り込むとその半身を抱え上げ、サトシの呼ぶ声の方へ誘導した。

「見てみるって！」

サトシは掘った穴に飛び下り、掻き出されたドロの隙間から溢れ出る水を弾いてはしゃいでいる。水は脛の位置にくるまで湧き出ていた。

「命拾いしたなあ！」

「これで一時しのげそうだ」

「そうだ、まだ諦めるのは早い。味方の助けを待とう！」

皆にそれぞれ、希望の光が差し込んだ。

「トオル、取り合えず傷口冷やそう。顔も洗え」

「ああ、悪い」

そうしていると、チャプンという音と共に、目の前に汲まれた水が置かれた。サトシだ。

「ほい、水！ 上澄みだけ取ってある」

そう言くと、得意そうに笑った。

私、トオル、サトシ。この三人は歳も近いせいか、特に仲が良か

った。同じ小部隊に配属され、この島に来てからはずっと一緒だ。そう。彼らとは凄まじいこの戦時下、今日まで共に戦ってきたのだ。不思議と三人で組めば怖くなかった。戦いの最前線でも死ぬ気はしなかったし、声が通らずとも面白いように連携が取れた。

全てがうまくいく……！三人が目を合わせると、それだけで闘志が湧き、根拠もなく自信が持てた。そして実際、私たちに弾はあたらなかった。

時には、誰にも内緒で家族を思い一緒に涙した。そして酒を呑んで、歌を唄って、拳をぶつけ合った。何よりも、いつもどんな時でも、最後にはガハハと笑い合った。

（私は……俺は……、今までどうして忘れていたんだ……）

取り戻した記憶の中に、自分の声がこだまする。

軍の病院で目を覚ましたのは、晩夏にさしかかった頃だった。眠っている間に戦争は終結を迎えていた。涙は出なかった。

瀕死の状態で救出されたらしい私は、意識のないまま帰還船に乗せられ、そのまま国に戻ったのだ。どうやら私は、敵の砲撃を喰らい吹き飛んだらしい。すべて後から聞いた話だ。

退院してからは故郷へ戻り、結婚して家庭を持った。その後は特に不自由することもなく、極々平凡に生きてきた。平凡でないことと言えば唯一、島での記憶がないことだけ。徴集令が下り、戦場に駆り出されたまではしっかりと覚えていた。しかし、島にいた間の一切の記憶が私の頭から抜け落ちていた。砲弾を受けた際の衝撃によるものなのだろうか、現地での記憶は完全に欠落してしまっていた。

「戦時下の記憶なんて、ないほうが幸せよ。神様からのご褒美だと思っ」

妻が言った。確かに言われればそうだ。人を幾人も殺めたかもしれない。その時の光景は易々と忘れられるものではないだろう。だ

ったら、きつと幸せなのだ。

しかし、そうではなかったらしい。だから私はきつと、魂になつてまで『ここ』へ来たのだ。

「うつうつ……！」

白い部屋で嗚咽を漏らす。

彼女は床に手を着く私の背中をさすり、優しく声をかける。

「大丈夫。ゆつくり、ゆつくりでいいんです……」

そして、更なる記憶が甦る

それはきれいな月夜の晩だった。

掘った穴から水が湧いた夜。そこを囲うようにして私達は眠りに付いた。向こうの山には敵軍のキャンプがあるのだらう、ライトの閃光が同じ分数刻みにチラついている。しかし、こちらは暗いジャングルの片隅だ。火も焚かず身を寄せ合う私達が、向こうの敵陣から見つかることはない。

ふと、トオルが口を開いた。

「部隊の本陣、もう撤退したんじゃないだろうか」

「大丈夫だって、俺達置いて行くかよ」

サトシがニツと笑いながら答える。

トオルは頭が切れる。そしてサトシは天性の明るさを持っている。そして彼らよりも一つ二つ年が上の私は、ここでは二人の兄的な存在だった。

私はこの二人が大好きだった。そしてそれは、三人共同じ気持ちだった。

「国に帰ったら、必ずに再開しよう！」

「うん、絶対会おう！ 会って酒呑もう！」

度々私達が口を揃えて言う台詞だった。

それからしばらくしてからのこと。うつらうつらと浅い眠りに身を委ねていた時、



「うああああ……！」

閉じていた瞼を開くと同時に、激しく慟哭した。待合室の中だ。

「みんな……みんな生きてるのか!？」

私は体を起こし、頭を振って取り乱した。

「トオルは……！サトシは……！」

我に返って周囲を見る。すると、こちらの状況を全く気にするでもなく、子供たちが相変わらず遊んでいる。彼女も同じだ。私の醜態に驚いた素振りなどは見せない。

「トオルさんもサトシさんも、もう下にはいらっしやらないんです。あなただって、そうでしょう?」

顔だけこちらに向けてそう言っていると、彼女はこくりと首を傾げた。そうだ、そうだった。私は今日魂だけの存在になり、体から抜け出てここにきたのだった。

旅立ち待合室。旅立ちの部屋。

きっと私は旅立つ前に、忘れていた『記憶』を取り戻す為にここへ来た。

私が望み、待っていたもの。それは自身の記憶だ。

次から次に涙が溢れる。

「何やってたっただ俺……！ あいつらに……あいつらに会いたい！」

こんなに泣いたことは、生前にはなかったように思う。

満たされているようで満たされず、終わったようで終わっていない私の人生。記憶の奥底に彼らを置き去りにしてきたあの日から、ずっと片隅に空白を抱えていたのだ。

何故か帰還を喜べなかった事、戦後の人生が空虚なものに思えていた事、腑に落ちなかった色んな事に納得がいく。忘れてはいけなかったこと、忘れられるはずもない、かけがえのないものの存在が、私の体から零れ落ちていたのだ。

「その後、爆撃を受けた後、彼らはどうなったんでしょうか」

「お二人はあの時に、あの場所で亡くなられています」

「なんと……あそこで……」

「はい。戦死でいらっしやいます」

あらためて私は、戦後の生涯を悔いた。私は彼らに、花の一本すら手向けてやることもしていない。

「向こうに行けばあいつらに会えるでしょうか……会って、詫びることはできるでしょうか……」

積年の涙に、後悔の念が混じる。すると彼女が言った。

「大丈夫、心配には及びません」

そう言つと、にっこりと微笑んだ。

「何故ならば、ほら……彼らはここに……」

「……！？」

私が慌てて右に左にと振り返ると、彼女は緩慢に手を上げ、何かの儀式であるかのように部屋の奥の「出口」を指差した。

すると突然、部屋で遊んでいる子供の中の二人がスッと宙に浮き上がった。そして光の魂となり、出口に吸い込まれていった。その先から、神々しい光が漏れてくる。

「ま、まさか……」

私はそれを追う様にして手をかざしながら覗き込んだ。するとその先に、肩を組み、私に向かい腕を振り上げている二人組の姿がぼんやりと見えた。

「お二人はずつとここで、あなたが来られるのを待っていらっしやったのですよ」

「あ……あいつらが……」

私は、目を凝らしてさらに奥を覗き込んだ。前方に向かって、雲のような地面が続いていた。

「本当に……本当にあいつらなのか……」

私が声を震わせると、彼女は「うふふ」と笑って頷いた。

私は膝から崩れ落ちた。床に付いた手にバタバタと涙が落ちる。

「本当に……おまえらなのか……！」

私が呼ぶと、黒髪に詰め襟の青年がひらりと手を上げた。その傍らでは、ランニングシャツ姿の青年が鼻をこすりながら笑っている。

「トオル……！ サトシ……！」

確かに、あの二人だ

懐かしい……嬉しい……さっきまで忘れていたとは思えないほど、二人への沢山の思いが込み上げる。

「すまない！ 決して……決して記憶を追いやっていたわけではないんだ……！」

すると彼らは、私に向かって返事を返した。

（んなこと分かってるよ、ショウイチ！ それより早く行こうぜ！）  
サトシが私の名前を呼ぶ      もう忘れかけていたが、確かにそれは私の名だった。

（行こう！ そして一緒に吞もう、ショウイチ）

トオルが果たせなかった約束を果たそうと言う      そしてこちらに向かい拳を突き出す。

「ああ……ああ……！ すぐ行く！」

ずっと彼らと会いたかった。そしてこうして、話しがしたかった

相変わらず涙が止まらない。戦後、淡々と過ごした私の人生に欠落していた熱いもの……あの日湧き出た水のように、私の目からは大粒の涙が、次から次へと溢れ出た。

「トオル……！ サトシ……！」

大声で彼らを呼ぶ。何度も何度も呼ぶ。死んでも尚、涙は出るのだな、と、頭の片隅で思いながら。

「よろしかったですね。では、行かれますか？」

「はい……、はい……ありがとうございます……！」

涙でくしゃくしゃになった自分の顔が彼女の瞳に映った。それは



土で汚れた、若い兵隊の顔だった。

（いつてらっしゃい）

女性は溫柔に微笑むと、ソファから手を振って私を見送った。  
二十代の体の私は、勢い良く出口に飛び込んだ。

暑い、熱い、遠い夏の日。

赤く染まった空と煙の立ちこめる山中。俺たちはどんな時でも笑い合う。

拳をぶつけ合った。三人で笑い合った。

そして言った。「全てがうまくいく……！」

俺たちは最強の仲間だった。

光に包まれた道を歩きながら、思い出話しに花が咲く

「なあ。そう言えばさ、あれ覚えてるか？」

「ああ、あれか」

「そうだな、山の上に像があったよな」

「うん、それぞれ。教会かなんかだったのかな、あそこ？」

「ではあれはマリア像か？ にしては、いやに派手な色使いだった  
が」

「さあ、よく分かんねえけど、きれいだったよな？ あの金色の髪  
の色」

ふいに優しい風が私たちを包んだ。その風に色があるとすれば、  
それは金色だった。

柔らかかにいつまでも、風は私たちに吹きそそいだ。

腕を絡ませ合った三人の高らかに笑い合う声は次第に小さくなり、  
光の奥へと消えていった。

## （後書き）

最後までお読み頂き、有難うございました。

この作品は、別の場所からの再投稿になります。  
自分の見た夢を題材にしたものだったので、違和感のある部分  
をご指摘頂いたので、そのご意見を参考に手直しをしたものです。

楽しんで頂けるものに仕上がっていますように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9922m/>

---

旅立ち待合室

2010年10月8日10時58分発行